

【エッセイ】

切手をめぐって —— 東ティモール・ギャップ

吉野文雄

ときどき、「東ティモールはインドネシアから独立して～」などという記述を目にするが、これは間違い。

1976年に東ティモールはインドネシアに併合された。住民投票を経て、インドネシアが東ティモール併合を取り消したのが1999年10月20日であった。その後国連安保理がやってきて、独立したのは2002年5月20日であった。この間の2年7カ月は、ティモール・ギャップにならって東ティモール・ギャップとでも呼んだらいいのではないか。

私が東ティモールに初めて赴いたのは、住民投票からちょうど1年後の2000年8月で、国連統治下であった。そのときに購入した切手の初日スタンプがこの写真である。



スタンプには2000年4月29日の首都ディリの消印が押してある。上の切手には「Dom.」、下の切手には「Int.」と記されており、それぞれ国内郵便使用、国際郵便使用であることが分かる。発行主体は UNTAET となっているが、これは国連東ティモール暫定統治機構の略。残念ながら料金が記されていないので、いくらだったのか分からない。私が持っている切手の

中で、額面金額の記されていないのはこれらだけではないか。

当時耳にした話で興味深かった話を2つ紹介したい。

第1は、電気のコンセント。壁についているソケットとか呼ぶやつ。英語では outlet。住民投票後内乱で破壊された町に、オーストラリアからやってきた復興支援の人々が新築家屋にオーストラリア流のカタカナのハの字のコンセントをつけたそう。それによって、国連時代はオーストラリアから持ち込んだ電気製品しか使えなかったという。オーストラリアの電気店が稼いだという逸話である。

第2は、電話。復興需要を見込んでいち早く乗り込んだオーストラリアは、混乱に乗じて東ティモールにオーストラリアの市外局番を割り当てたらしい。オーストラリアから支援に来た人々向けのサービスだったようだが、その後の盗聴などにつながっているかもしれない。番号の割り当ては国際電気通信連合（ITU）も承諾したように聞いている。

以上2つは伝聞情報で、裏を取ったわけではない。帰国後、北朝鮮がつぶれたら、日本からコンセント・プラグを大量に持込んで建設支援をし、どこかの市外局番を割り当てて便宜を図ってやったらよいと、私は会う人ごとに訴えたが一笑に付された。

今考えれば、一笑に付すべき言説であったと納得している。